

1-2-6a人間

「人間」は、現代文の最重要テーマの一つです。

ここでは、「主体」と「個」について考えていきましょう。

①主体としての人間

まず、人間が「主体」であること。

それは、近代の《豊かさ》を人間自身が生み出したという実感や自信に裏打ちされたものであり、近代の世界観であるデカルト二元論の語るところです。

肯定的に論じられるのか、否定的に論じられるのか、は文章によって違いますが、、、人間が「**主体**」であることが人間を語る上での出発点になります。

しかし、人間が本質的に「**受動性**」をもっていることも忘れてはなりません。

たとえば、世界的に猛威を振るったCovid-19ですが、その状況を私たちが受け入れるしかありませんでした。

それに抗って少しでも病人や死者を減らそうとしたことはたしかでしょう。

こうした逆境に立ち向かうことこそが人間の主体性です。

が、私たちがこの世界で生きる以上、人間はこうした受動性から逃れることはできません。

② 「個」であること

i) 「個」の誕生？

一人一人の人間を主体だと考えるところに「個人」が誕生します。

でも、それは本当でしょうか。

たとえば、家においしそうなケーキがあつたら、それを食べたいと思うのは自然な欲望でしょう。

その欲望は、その人個人の気持ちです。

が、実際に食べるかどうかは、周りの状況によります。

そのケーキが自分用なら喜んで食べるでしょうし、来客用なら我慢するのが普通です。

家族の一員として、それは当たり前ですよね？

私たちは、常に「個人」であり、かつ、常に「社会の一員」なのです。

しかし、貧しい時代には「社会の一員」であることが優先され、豊かな時代には「個人」を優先できることが多い、というだけでしょう。

近代に「個人」が誕生するのは、それだけ近代が豊かになったからです。

ii) 個：主体的に社会を作り出す存在

が、ここで注意しなければならないのは、近代の「個人」あるいは「個」という概念は、ただの〈一人の人間〉ではないことです。

人間は人ととの間でしか生きられない以上、「個人」は、「主体」として社会を作り出す存在だと考えられていました。

日本国憲法が想定しているのもそうした「個人」です。

選挙権は、個人の権利であるとともに、主権者として国民の代表を選ぶ義務でもあります¹。

それは、一人一人の国民が主体的に投票することで国家を作り上げる、と考えられていますからです。

世の中で一般的に使われている「個人」は、ただの〈一人の人間〉という意味であることが多いようです。

しかし、現代文では、主体としての「個人」、つまり〈主体的に社会を作り上げる一人の人間〉という本来の意味で使われていることがしばしばありますので、注意してください。

iii) 数としての個→匿名性

民主主義は、こうした「個人」を前提としていますが、だからといって、それは「人間」を大切にしていることにはなりません。

¹ <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/6350.pdf>

民主主義においては、人間はただの「数」にすぎません。
その意味で、民主主義は近代の産物だと納得できるはずです。
近代が求めたのは、量的な《豊かさ》なのですから。

そこでは、一人一人の人間の能力や経験を一切考慮する必要がありません。
「顔」も「名前」もありません。
そう考えると、民主主義の延長上に、現在のネットの状況があるのかもしれません。
たしかに、ほとんどの人が「匿名」のまま、無責任に、自分の意見を言ったり、他人をあげつらったりしています。
が、もし私たちが質的な《豊かさ》を手に入れたいなら、何らかの形で「顔」や「名前」を取り戻す必要があります。

③ 「個」と「社会」

i) 近代以前：社会の一員

近代以前、《貧しさ》のなかで生きていくために、人々はまず「社会の一員」として生きていたことでしょう。

互いに助け合うことは《貧しさ》のなかでは大切なことでした。

ii) 近代：個

近代になって豊かになると、人々は自分のことをまず「個人」だと考え、その個人が主体的に作り上げるものこそ「社会」だと考えられました。

iii) 現代：私

現代になって、より豊かになっていくと、、、

私たちは、さまざまな社会や人々と広く浅くかかわるようになっていきます。

たとえば、高校生なら、一日のなかで、家庭や学校のクラス、部活、塾と渡り歩き、さらには、電車やバスで通学したり、コンビニやコーヒーショップで買い物したり駄弁ったり、、、

そこでかかわる人たちすべてと濃厚な関係を築くことなどできるわけがありません。

だから、自然と、その場その場での自分の役割、キャラをうまくこなしていくことが求められるようになります。

その一方で、SNSやスマートアプリなどを通じて、名前も顔も知らない人同士がつながりあうという現象も普通になっています。

こうした一時的な関係性や匿名の関係性は、「社会」という概念でとらえきれるものなのでしょうか。

そこに集う人たちを「個人」という概念でとらえていいものでしょうか。

「個人」とは、本来、〈主体的に社会を作り上げる、一人の人間〉です。

現代人がこうした社会性を失っているならば、それはもはや「個人」とは呼べません。

仮にそれを「私」と呼ぶことにすると、現代は「私」がその場の状況に合わせて離合集散することで成り立っているといえるでしょう。

現代病ともいえる「[アイデンティティの危機](#)」は、こうした人間関係の希薄さが引き起こしたものです。

自分を実感するためにはたしかな他者とのかかわりが必要だからです。

こうした状況を逃れようとして、私たちは「[親密](#)」な仲間や生きがいを求めます。

しかし、こううまくいかないからこそ、キャラを演じて、その場をやり過ごそうとするのでしょうか。

しばしば「[公共](#)」の問題が論じられるのも、本来の意味での「社会性」が希薄になった現代において、もう一度、公的な人間関係を問い直そうという試みだといえます。